



2019年度
傾向と対策

英語

傾向分析 文章読解は標準レベル
会話問題や語彙・文法・語法がバランスよく配分されている

① 出題形式は？

大問が4題あり、解答数は大問Ⅰと大問Ⅱが10個ずつ、大問Ⅲと大問Ⅳが5個ずつの合計30個である。全問マークセンス方式の選択問題で、四者択一形式である。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

大問Ⅰは300語程度の文章読解問題で、1つは和菓子についてのエッセイ、もう1つは世界のさまざまな祝賀行事について書かれた説明文である。設問は、単語や語句の意味を選択するものが2~3問、適語選択問題が2問、その他は本文の内容に合う英文を完成させる問題である。大問Ⅱは会話文読解で語数は200字程度である。1つは全問、会話の流れが通るように空所に入る適語句を選択する問題であり、もう1つは適語句選択問題が3問、その他は対話の内容に合う英文を完成させる問題である。また、大問ⅢとⅣは1文ごとの文法・語法を問う空所補充形式問題と会話の流れが通るように、空所に入る適語句を選択する問題が出題されている。

③ 難易度は？

大問Ⅰ、大問Ⅱは親しみやすいテーマの文章であり、設問文や選択肢も本文を複雑に言いかえたものはない。使用されている単語も平易なものが多い。また、語法問題や単語問題も高等学校で学習する標準的なレベルで、全体的に解答しやすいといえる。大問Ⅲと大問Ⅳの文法・語法問題は、基礎~標準的な難易度である。

受験対策

① 基礎を確実にマスターする

文法・語法問題については、中学校~高等学校で扱う文法を網羅した参考書を一冊、確実にマスターするのが合格への近道である。設問は動詞の時制や活用、イディオムを中心とした基本的な事項を確認するものが多いので、それらを幅広く扱った標準レベルの問題集も合わせて取り組みたい。会話問題については、知識の有無で得点に差がつく設問がほとんどである。基本的な会話表現が網羅された問題集を一冊準備し、会話の定番表現を身につけるとよい。また、相手の発言を受けて答えを推測する問題も増加傾向にあるので、会話の流れをつかむことを意識しながら読むことを心がけたい。

② 文章読解問題はスキミング、スキヤニングを意識する

高等学校で使われている教科書の素材文や、テーマを広げる意味で同等レベル・語数の英文読解問題集を準備し、英文を読むのに慣れることが最低限必要である。親しみやすいテーマの文章なので、先に設問文や選択肢に目を通すスキミング、該当箇所を探し読みするスキヤニングをしてから読み進めると、必要な情報を素早くつかむことができ、解答時間の短縮にもつながる。

③ 会話文の問題にも慣れておく

会話文の問題では、基礎的な文法力や読解能力を求められることはもちろんだが、会話文特有の文章表現にも注意が必要である。文法問題等で目にする表現でも会話文で用いると違う意味になることもある。また、会話文においては、問題部分の前後の流れを理解しておくことができる問題が多いので、その点に注意しながら会話文形式の問題を数多く解いて出題傾向をつかんでおくとうい。

数学

傾向分析 数学Ⅰ，数学Aの全範囲からまんべんなく出題される
教科書レベルの基本～標準の問題を確実に解けるようにしておく必要がある

① 出題形式は？

全問がマークセンス方式で，問題数は大問6題，大問Ⅰ～Ⅲは必答問題，大問Ⅳ～Ⅵは3題から2題を選んで解答する選択問題となる。空欄1つには1つの数字もしくは選択肢が入る。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

大問Ⅰが小問集合（根号を含む式の計算，式の計算，命題と条件，三角比，データの分析など），大問Ⅱが1次不等式の解や集合，大問Ⅲがデータの分析や三角比で数学Ⅰの範囲からの出題である。選択問題は，大問Ⅳが場合の数や確率，大問Ⅴが整数の性質，大問Ⅵが図形の性質で数学Aの範囲からの出題であった。

③ 難易度は？

全体的に難易度は標準的な問題が多く，難問や奇問，融合問題などの応用問題は出題されていない。出題範囲は数学Ⅰ・数学Aで，教科書にあるような基本～標準的な問題をミスなく解けるようになっていれば確実に点数を積み上げていくことはできるであろう。

受験対策

① 典型的な解答パターンをしっかりと身につける

教科書に載っているような基本～標準レベルの問題が出題されるので，深い思考を要する問題や複雑な計算が必要とされる問題などは出題されていない。決まった道筋で考え，確実に計算などを進めていけば解答にたどりつけるので，教科書の例題など紹介されている問題は解答を見ずに確実に解けるように演習を積み重ねておいてもらいたい。

② 時間配分をしっかりと行う

試験時間60分で数学Ⅰの必答問題3題と数学Aの選択問題2題を解かなければならないので，単純に計算すると1題にかけられる平均時間は12分である。途中で詰まってしまってその問題に固執してしまうと解ける問題も解けなくなってしまうので，少し考えて解けそうになれば，ひとまずその問題から離れて解ける問題からどんどん解き進めていこう。時間があればあとでその問題に戻ればよい。戻れなくても満点を取る必要はなく合格点を取ればよいので，時間のかかりそうな問題には早い段階で見切りをつけて次に進むという切り替えをうまく行っていこう。

③ 関数や図形の問題はグラフや図を描いて考える

関数や図形の問題などはそのまま解くと状況を捉えにくい場合があるので，必ずグラフや図を描いて視覚で確認しながら解いていこう。図形が与えられている場合も辺の長さや角度を書き込んでおくと状況が整理しやすくなり，得点へと結びつく。関数は場合分けが必要なこともあるので，そのときも各場合での図を描くことによって一つ一つの状況を理解し，確実に点が取れるようにしておこう。

国語

傾向分析 読みやすい論説文で平易なレベル
語彙力を身につけて丁寧に読む

① 出題形式は？

全問マークセンス方式の五者択一問題で、大問が2題、各大問に小問が10問ずつの構成である。解答数は昨年の36個から、各大問の小問2、小問3の解答数が1つずつ減ったことにより32個になった。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

論説文が出題されており、小問の構成も解答数以外はほぼ変化は見られない。小問1は漢字、小問2は語句の意味、小問3は空所の語句補充問題。小問4～10は読解問題で、箇所内容の説明、理由説明、空所補充、脱落文補充、内容把握問題である。

③ 難易度は？

論説文といっても、1つの具体的なテーマについて筆者が説明する記述が多く、抽象的で複雑な論理的文章ではないので、文章は平易である。すんなり読み通せる力を身につけておきたい。問題も本文の読解を助ける内容で、難易度は高くない。模擬試験などで、社会科学をテーマとした論説文に幅広く触れておくとういだろう。

受験対策

① 基礎的な語彙を増やす

漢字や語句の意味の問題は難しくない。出題されているのは論説文に頻出する基礎的な語彙ばかりなので、論説文全般に対応するためにも迷わず答えられる語彙力を身につけておきたい。知識を増やすことは一朝一夕にはできない。特に日頃の読書量が少ない人は、さまざまな文章を読み、わからない言葉があればそのつど辞書で意味を調べ、使い方を覚え、漢字で書けるように練習するという地道な学習に取り組んでほしい。

② 文章の流れを丁寧に読み取る

出典の論説文は平易で、読解に抽象的で高度な思考を必要としない。しかし、具体的な事柄の説明に終始する文章の場合、記述内容が筆者の考えなのか、一般論なのか、筆者はその内容を肯定しているのか否定しているのかなど、文章の方向性や立場がわかりにくい場合がある。明らかな接続語などがなくても話が転換していることもあるので、話の流れを見失わないよう、一語一語を読み飛ばすことなく丁寧に読み進めよう。話の流れがつかみづらいときは、空所補充問題や脱落文補充問題を先に解くとよい。また、自分の知識や価値観に頼って、思い込みで解答することは禁物である。

③ 時間配分に慣れる

試験時間60分に対して、解答数は32個あるので、余裕をもって時間配分ができるようにしたい。空所や脱落文が多く設定されているので、先に問題に目を通しておおまかな内容を頭に入れてから本文を読み進めるほうが効率がよい。出題部分の前後を確認すれば解答できる問題が多いが、全体を読んでいないと結局前に戻って読み直すことになり、時間を無駄にしてしまう。思い込みや勘違いを防ぐためにも飛ばし読みはしないほうがよい。

日本史

傾向分析 出題は時代・分野とも比較的バランスがよい
 解答形式は4択の記号選択で対応しやすいものである

① 出題形式は？

2日程とも、試験時間は60分、問題は大問5題で構成され、解答数は大問1題に対して小問10個の全部で50個、全問マークセンス方式による四者択一の選択問題である。いずれも大問Vは2つの文の正誤の組み合わせを問う問題10題で構成されている。

② 出題内容はどうか？

1月30日実施分は、Ⅰは奈良時代の政治史、Ⅱは室町時代の政治史・社会史、Ⅲは江戸時代中期・後期の各分野、Ⅳは明治期の経済史、Ⅴは古代から近代までの文化史の内容で構成されている。また、1月31日実施分は、Ⅰは平安時代から鎌倉時代にかけての政治史、Ⅱは鎌倉時代から室町時代初期にかけての対外関係史、Ⅲは江戸時代の農村社会史、Ⅳは戦後改革から55年体制成立の頃までの政治史、Ⅴは古代から近代までの文化史の内容で構成されている。大問Ⅰ～Ⅳは大部分が教科書の重要語句中心の学習で対応できる内容である。しかし、大問Ⅴは美術作品一覧の記載や副教材の立ち入った説明の内容が含まれた知識も問われており、一段と深い学習が必要とされている。

③ 難易度は？

大問Ⅰ～Ⅳは、基礎的知識を問うものが中心である。しかし、大問Ⅴは2つの文それぞれについて正誤判定をする完答問題であるうえに、その約半数が詳しい知識を必要とするものである。大問Ⅴを考慮すれば、全体としては決して難易度が低いとはいえない。

受験対策

① 教科書の重要語句中心の学習は確実にしよう

単に語句だけを覚えるのではなく、本文は当然のこととして注記や図版解説も組み入れた説明ができるようにしておくべきであろう。これによって大部分の問題には対応可能である。これができたらうえて、さらに詳細な知識を関連づけることによって、どこからはじまってもひとまとまりの知識が導き出されるようにしよう。また、教科書だけで不安に感じたら、まずは副教材で調べる習慣をつけよう。

② 文化史は副教材を十分に活用しよう

大問Ⅴは「図集」「図版」「図録」などの副教材で対応できる問題が多く見られる。教科書に掲載されている人物・作品などは副教材で図版・説明を逐一確認しておこう。今年度では、広隆寺半跏思惟像の写真と技法（木造）、『菟玖波集』編集の協力者が救済（ぐぜい）であることなどは、このような副教材によって印象付けられたり知識が得られたりする。この問題で点差が大きくなると思われるので注意しておきたい。

③ 時間配分に気をつけよう

試験時間60分に対して50問あるので、受験生によっては時間が足りなくなるだろう。一見して得意な問題から取り組む、一旦時間をかけて取り組んだらひとまず解答を出しておき、時間に余裕があれば再度取り組む、などの工夫が必要である。これは、学校の定期試験や予備校などの模擬試験で訓練することによって十分に身につけることができる。

生物

傾向分析 生物基礎・生物について、幅広い分野から出題される
細かい知識を必要とする問題が多く、応用問題にも注意が必要

① 出題形式は？

大問数4題、小問数35問からなるマークセンス方式の試験である。各大問は、1～3つの文章を読んで解答する形式となっている。試験時間は60分である。

② 出題内容はどうか？

生物基礎（全範囲）と生物（生命現象と物質、生殖と発生および生物の環境応答）の分野から、細胞と分子（生体物質、細胞小器官、細胞膜のはたらき、酵素反応のグラフ）、代謝（呼吸）、バイオテクノロジー、体内環境の維持（浸透圧の調節、ホルモンによる調節）、発生（中胚葉誘導）、動物の環境応答（ヒトの眼の構造、明順応・暗順応のしくみ）が出題されている。

③ 難易度は？

教科書の内容から幅広く出題されており、基礎～標準レベルである。呼吸の各反応系に関わる物質など、正確な細かい知識が必要とされる。グラフを選択させる問題や実験考察問題も出題されているが、基礎～標準レベルの問題が多数を占めている。

受験対策

① 教科書をベースにして、細かい内容まで確実に理解しておく

生物基礎は全範囲から、生物は「生命現象と物質、生殖と発生および生物の環境応答」から、とあらかじめ入学試験要項に記載されているので、これらの分野について、教科書をもとに確実に理解しておく必要がある。細かい知識が必要とされる問題も多いので、教科書の内容をすみずみまでおさえておこう。グラフや実験考察問題についても、教科書に載っている内容なので、教科書に掲載されている図や実験については、図の特徴や実験の目的・方法・結果・考察を自分で説明できるようにしておきたい。

② グラフの問題や実験考察などの問題、生命現象が起こるしくみの問題にも対応できるように

基礎知識がある程度身についたら、グラフの選択問題や実験考察問題などの応用問題が載っている基礎～標準レベルの問題集に取り組むとよい。自分の知識の確認にもなるし、応用問題の考え方に慣れることも大切である。文章の正誤問題も多く出題されているが、さまざまな生命現象について、どのようにしてその生命現象が起こるのか、というしくみを確実に理解しておく必要がある。そのためには、さまざまな生命現象について、どのような順番で何が起こるのか、を自分で説明できるようにしておくとうい。

③ さまざまな問題の出題パターンに慣れる

生物は出題範囲が限られている分、パターンを変えながら出題しているケースが多い。どのような出題形式にも柔軟に対応できるよう、知識を問う問題から実験問題まで幅広い問題を解いて、さまざまなパターンの問題に慣れておく必要がある。学校で使用している問題集や市販されている問題集などを解いたり、予備校の模擬試験などを積極的に受けることによって実力を確認し、弱点をなくしていく学習法を行うとういであらう。